

正行寺

松本には^{しょうぎょうじ}正行寺が2ヶ所あります。城下の^{しもよこた}下横田町にある正行寺と松本市^{しまだちみなみくり}島立南栗にある正行寺です。城下にある正行寺は、城主石川氏と深い関係をもっています。また、明治の廃仏毀釈のさい、これに強く抵抗し廃寺にされることを拒みとおした佐々木了綱が住持だったことでも知られています。

1 正行寺と石川氏

(1) 石川氏が移転

城下の正行寺は、「大宝山専修院正行寺」といい、真宗大谷派のお寺です。石川氏が松本へ来て城下の経営を始めたとき、島立の栗林にあった正行寺を城下に移転させました。

河辺文書の「大守累年記」の石川数正の項に、菩提所の正行寺を栗林村から大手先の女鳥羽川北に移した、その後今の場所へは子息玄蕃頭の代に移した、という記事がみられます。この記事によれば、石川氏がもともとは島立の栗林村にあった正行寺を大手門の西脇へ移転させ、さらにその子の康長が現在の位置である^{しもよこた}下横田町へ移転させたということになります。



正行寺本堂

下横田町

(2) 石川氏の文書

正行寺には、石川氏との関係を物語る史料が残っています。一つは康長が正行寺の移転に関して家臣にあて指示をした文書（年次不詳2月26日「石川康長書状」『信濃史料』第17巻）と、家老から寺の屋敷地と灯明料として収益を寺がつかうことができる土地の広さを示された文書（慶長11年10月26日「渡邊金内青山次助連署状」『信濃史料』第20巻）です。

前者には、寺域として35間四方の土地を確保するようとの指示と、もし狭い場合は自分（康長）が国許へもどってからさらに土地を与えること、材木は担当する人足の諸役を免除するのでその人足をつかって切り出すこと、切り出して確保してある材木をつかってはいけない、堂建築のことについてはいちいち自分に問い合わせず、お寺や門徒の人々と相談してはかがいくようにすること、と書かれています。これらを見ると、石川氏が正行寺の移転建築に大きく関わり、寺の保護にも力をつくしていたことがわかります。

(3) 石川氏と真宗

石川氏は、徳川家康の家来として三河にいたとき、真宗の東本願寺派と深いかわりを持っていました。三河の地には東本願寺派の門徒が多かったといいますが、家康はこれと全面对決する姿勢をしめし、三河一向一揆（1563～64）が起きます。この一向一揆方に石川氏の関係者が多く加わっています。数正の父親も一揆方でした。石川の宗家をついだ叔父と数正は一揆方には加わらず、家康方でした。石川氏の中は宗家と諸家が分かれて対立したわけです。

家康について人々は自分の宗旨を家康と同じ浄土宗に変えたといえます。数正も同じように宗旨を変えて家康についていたものと思われます。一揆を平定した家康は、しばらく真宗の信仰を禁じ、天正11（1583）年になって真宗を許可します。

数正が松本へ来て、真宗東本願寺派の寺院である正行寺を城下へ移転させたことは、数正が家康の手前一時的に真宗を離れたとしてもその後宗旨を真宗にもどして、これを厚く信仰していたことを物語っています。

2 正行寺のあゆみ

(1) 開基は了智

正行寺は、もともとは島立南栗にありました。開基は佐々木^{たかつな}高綱と伝えています。

佐々木高綱は源平合戦のおり、宇治川の戦いで梶原景季^{かじわらかげ すえ}と先陣争いをした逸話で有名な武将です。のちに出家して高野山に入り、のちに諸国を修行し出雲国で亡くなったといわれていますが、経歴がよくわかっていません。寺の縁起では出家して了智^{りょうち}と名乗り、佐渡に流された親鸞（1173～1262）に弟子入りし、親鸞が常陸へ赴くのに従って信濃へ入って、正行寺を開いたと伝えています。南栗の南方には了智の墓といわれるところも伝わっています。寺に伝わる「四遵連坐の御影」には、親鸞・法善・西仏・了智とあって、法系が親鸞の4代目にあたることから、了智は鎌倉末から南北朝時代の人で、直接佐々木高綱にはつながらないのではとみる人もいます。

(2) 城下と島立に二寺

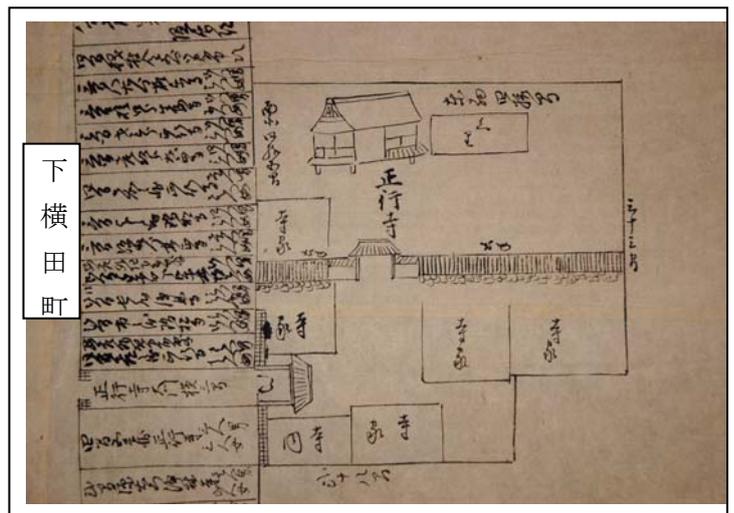
真宗の寺院として、島立の地には正行寺と極楽寺^{ごくらくじ}があり、三溝に安養寺^{あんやうじ}（元は新村にあり）がありました。戦国時代の元龜3（1572）年には武田信玄がこれら三寺の深志城普請役を免除して織田信長と本願寺とがあらそった石山合戦に参加しやすく配慮していますし（正行寺文書 元龜3年7月25日「武田信玄朱印状」『信濃史料』第13巻）、天正5（1577）年には、極楽寺が石山本願寺へ兵糧を送っています。この3寺は有力な真宗寺院だったわけです。石川氏はこのうちの二寺を城下町へ移しました。

南栗の正行寺の場所には名前を変えて一寺が残ったといえます。その寺は延享3（1746）年に西本願寺派になって現在の大宝山高綱院正行寺となっています。明治の陸軍大将乃木希典^{のぎ まれ すけ}は祖先が佐々木高綱であると伝えられていることから両方の正行寺を訪問しています。

3 江戸時代の城下の正行寺

(1) 元禄の絵図に描かれた寺

「元禄期松本城下絵図」には、右のように描かれています。左が横田町の通りでそこから正行寺大門とかかれたところを東に向かって門をくぐると寺域へは入ります。上が北ですので、本堂は南に向いていました。下図の『善光寺道名所図会』の絵図もこれと同じ向きに描かれています。けれども、右図には本堂と庫裏はありますが下図にみえる太子堂はありません。寺家も5軒分が書かれています。



元禄期の正行寺 「元禄期松本城下絵図」より

あとででてきますが、正行寺は享和3（1803）年に火災にあ

い本堂などを失います。右の絵図は火災前の状況を描いています。享和3年に焼失した建物は、しばらく大規模な復興ができず、ようよう復興がはじまったのが天保13（1842）年、完成が安政5（1858）年であったといえます。

(2) 『善光寺道名所絵図』に描かれた寺

『善光寺道名所絵図』のなかに江戸時代の寺の様子をうかがうことができる絵があります。境内には、本堂・太子堂が並び、向かって右手に玄関・庫裏があります。玄関と庫裏をつなぐ回廊の向こうに太鼓堂、本堂の前の庭には経堂・鐘楼・佐々木塔、池があります。本堂前は土塀がまわっています。その外には、塔頭である浄信寺・妙勝寺・玄正寺・芳仙寺が描かれています。ちなみにその右に描かれているのは長称寺です。和泉町にあった寺で、雲でわけて描かれているように別の寺です。

この絵図がいつごろの様子を描いているかは、確定できていません。『善光寺道名所図絵』は筆者の豊田利忠が天保初年から14（1843）年まで善光寺道を尋ね記録したものを、嘉永元（1848）年に校閲をうけてその翌年に上梓されています。すると天保年間以後の様子を描いていると考えられますが、先に述べたように、正行寺の建物は享和3（1803）に餌差町から出火した通称飴屋火事によって焼失してい

ます。建物の復興は佐々木了綱の代で、天保13（1842）年に起工して安政5（1858）年に竣工したといわれていますので、この絵図に描かれた境内の様子は、享和の火災以前のものかあるいは復興途上にあった時の様子なのか、不明です。

『善光寺道名所図会』には、石川氏が波田にあった阿弥陀仏の像を本尊にしたとか太子堂の本尊は放光の太子とって安曇郡丹生子村近辺の満仲にあった古木の穴から出現したものだという伝承も記しています。また、寺の宝物として、「四尊連座御影」「同御写 一如上人筆」「六字名号 蓮如上人筆」「石山御本山御楼御本尊 教如上人筆」「放光聖徳太子」「佐々木高綱冑太刀」「武田信玄公御朱印」「遊行上人の和歌 六幅」を書き上げています。



(3) 藩主戸田光悌の生母谷口氏の墓

後の戸田氏2代目藩主光雄の側室であり、5代目藩主になる光悌を生んだ谷口氏の墓石が、墓域の中にひっそりと建っています。墓石には「清證院殿釈尼唯成妙甫正定聚」「享和二壬戌年六月二十六日」と刻まれています。

側室については詳細が不明で、この方も谷口姓であることはわかりますが、身分や側室になった経緯はわかりません。この方が亡くなった年より46年前に夫光雄が、16年前に息子光悌が亡くなっています。



藩主戸田光悌の
生母谷口氏の墓

4 遊行上人が正行寺へ —正行寺に5万人からの人が集まった—

時宗の開祖一遍は、日常を臨終として阿弥陀如来の名号を唱えることで往生することができるという教えを、諸国を行脚し念仏踊りをおこなって広めました。一遍の教えは時宗とよばれ、また諸国をめぐったことから遊行宗とも呼ばれました。一遍はその修行中に熊野権現が夢にあらわれて、人々に「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と刷ったお札を配る（賦算という）ようにというお告げを受けて、人々に札を配って

歩きました。

一遍亡き後を継いで時宗を指導した僧は遊行上人と呼ばれ、一遍の遊行の教えを守り諸国を廻りました。全国をまわっていることから戦国時代には大名の情報源として歓迎されたといえます。江戸時代になると形式化したようですが幕府や藩の保護をうけて、引き続き遊行上人の廻国が行われました。

松本へも遊行上人が来ています。記録で明らかなのは、宝暦9（1759）年と安永5（1776）年と文政8（1825）年です。いずれも正行寺に滞在しました。人々はこぞって参集し上人から賦算を受けました。その数は宝暦9年に54,025人、安永5年に35,603人、文政8年に55,100人を数えています。当時の松本町の人口が約八千から一万人といわれています。それに武家の家族の人数をいれても15000人には満たなかったと思われるので、この参集者の多さには驚きます。

（1）文政8年の様子

文政8年の記録からその様子をみましょう。

前年の文政7年の4月に、藩の町所から同年の8月ころ遊行上人（遊行上人78世 願心 57歳 奥州白川出身）が松本へくるとの通知が町役人のもとへもたらされました。5月には藩側から手代2人と書役1人、町側から大名主3名が掛りに任命されました。8月には逗留先となる正行寺の普請も始まりました。しかし上人が途中で病にかかり治療のため松本着は翌年にずれこむことになって、準備は一時中断します。

上人は翌8年3月に松本へやって来ることになり、2月には正行寺の普請を再開します。3月6日には御朱印伝馬50匹と人足50人が迎えに派遣されます。8日に先触の僧が到着しました。11日には松本町13町の町役人に対し、火の用心や多人数の入り込みへの配慮や掃除の指示が出されました。それとともに上人逗留中は町ごとに分担して1日人足20人を出し、町役人は正行寺に詰めるように命じられています。

上人は治療で滞在していた甲府一蓮寺から佐久へ入り、一遍が踊念仏を始めた場所である伴野野沢の金台寺に滞在し、そこから小諸・上田・松代を経て12日に松本へ入りました。

その行列は、露払2人（袴着用）同心2（羽織）正行寺檀那数十人（袴）塔頭妙勝寺 正行寺後住（駕立傘 挟箱 合羽籠）塔頭2 露払2（袴）挟箱2（菊桐金紋付）熊野権現（朱塗厨子入）露払2（袴）宝物長持 露払2（袴）露払2（袴）同心2（ハッピー）御朱印櫃 僧数十人（踏込）上人（朱網代輿乗物 床几 杖）茶弁当（銀）挟箱2（菊桐金紋付）合羽籠 駕（僧1）乗掛馬（僧14・5匹）という大きな規模のものでした。

正行寺の門前には、藩から者頭と先手組の足軽・町奉行・目付が出張して待機し警護にあたりました。到着した12日から人々が押しかけ、17日までに28,200人、日延べがきまった18日には1日10,400人、その後24日まで合計55,100人が参詣しました。この間には念来寺や浄林寺の住職や城下の名主・肝煎も面会しています。上人は放生会も催しています。

25日に上人は松本を離れます。町役人たちは博労町の薄川に掛る大橋の手前まで見送りに出ました。

5月になってこの行事にかかった費用などの勘定が行われました。それによれば銭にして401貫233文、人足3,108人であったと集計されています。

このように、遊行上人の廻国は非常に大掛かりな行事でした（以上の史料は松本市文書館所蔵河辺文書中「文政八乙酉年三月 遊行上人様御通行諸記録 河辺盛信」による）。



上人から人々にわたされた札

松本市文書館所蔵 河辺文書

5 廃仏毀釈に抵抗した住職佐々木了綱

明治新政府は、慶応4（明治元）年に神仏分離令を出し、神社から僧形をした者や仏像・仏具を取り除くように命じ、神と仏の分離をはかりました。政府の宗教政策を担当する人々のなかには仏教渡来以前の古来の神道を重んじる復古神道の立場に立つ人たちが多く、流れは廃仏へと動いていきました。そこには、江戸時代に寺請^{てらうけ}制度で寺に縛り付けられ収奪もされてきたと感じていた民衆の気持ちも重なって、うねりがより大きくなったといえます。

松本藩では、明治3年に廃仏毀釈の藩令を出しました。藩主戸田氏の菩提寺であった全久院も破壊の対象とされたように、多くの寺が廃寺、仏像・仏具の破壊や焼却や散逸といった目にあい、住職は帰農させられました。松本藩の廃仏毀釈の動きは、苗木（岐阜県中津川）・富山（富山県）・津和野（島根県）・鹿児島（鹿児島県）などの諸藩とともに全国的にみても激しかったうちのひとつだといわれています。

そのようななかにあって、藩庁の命に従わず、果敢に反対を唱えた住職たちがいました。真宗である佐々木了綱（正行寺）、三浦義尊（宝栄寺 松本城下）、小松了照（安養寺 東筑摩郡波田町）、禅宗である快竜（大沢寺 大町市）のや安達達淳（霊松寺 大町市）などが著名です。

佐々木了綱はたびたび藩庁の役人と涉り合い、寺院には本山があるが藩はそことどのように話をつけているのか、自分の寺も中本山格で末寺への責任もあるから藩の命令には従いかねる、神仏分離の命令は聞いたが廃仏の命令が出たことは聞いたことがないなどと突っぱねました。藩庁の役人は、懐柔・強迫とあらゆる手をつかって同意させようとしたましたが、了綱はとうとう同意しなかったといえます。彼がそこまでがんばったのは、新政府側の情報をつかみ全国的な動向をみて、松本藩で行われていることが、全国どこでも同規模で行われているわけではないことを知っていたからだといわれています。彼の踏ん張りによって安曇・筑摩郡下の松本藩領にあった真宗寺院23ヶ寺は廃寺から免れることになりました。

了綱は文化9（1812）年の生まれで、10歳で父を失い、11歳の時には病で右眼を失明するという不幸にあいます。早くに父の跡を継ぎ享和3（1803）年に焼けた本堂などの再建を果たそうと、江戸や沼津などで浄財を集め、ようよう天保13（1842）年に起工し安政5（1858）年に竣工させました。また、その間に京都へ出て禅や万葉集を学んだといえます。また藩主の意をうけて近畿や北陸の旧知を尋ねながら諸藩の動向をさぐることもしたといえますから、たんにお寺にとどまっていた僧ではなく、行動的な肝が据わった傑出した人物だったようです。

筑摩県になって、中教院の権少講義という役につき僧侶の取り締まりにもあたりました。明治10年からは和歌の同好会の会員となって作歌や批評をしました。58歳のときにはもう一眼の光を失い盲目になりました。明治19年、山家小路から出た火は北へ燃え広がり、北深志の東側を焼く大火となりました。このとき彼が苦勞して建てた本堂などが焼失しました。翌年京都の六角堂を模した観音堂を建てます。

明治27年、乃木希典将軍が先祖佐々木氏のゆかりの地として正行寺を訪れ、以後音信を通じることとなります。明治34年に76歳で没しました。（旧版『松本市史』下巻 『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』第三巻現代下、同別篇人名による）



佐々木了綱

旧版『松本市史』